



01

# DK Engineering

「DK エンジニアリング」

www.dke.com



「DK エンジニアリング」のミュージアム・ショールームにはフェラーリ 166MM 「ピニン・ファリーナ・ベルリネッタ」がきれいに仕上げられて展示されていた。世界にこれ1台の貴重品。下はデイヴィッド、ジェイムスのコッティンガム父子。



上はご存知ポルシェ 904 カレラ GTS。下のシャシーはロンドンのデザイン・ミュージアムで開催されている（<https://designmuseum.org/>）「Ferrari under the Skin」展に展示するために用意された 1957 年フェラーリ 250GT。



ワークショップでは数多くのフェラーリがメインテナンス中。なかでも特別注目だったのがフェラーリ 250LM。これはかつてわが国にあった1台で、フル・レストレイションが行なわれる途上であった。まさしく宝箱のような一角であった。

そもそもは40年前、1977年にディヴィッド＆ケイト・コッティンガム夫妻によって設立されたもの。それも最初はジャガーXK120をレストレイションしレースをはじめたところからスタートした。それがフェラリ中心に発展し、販売からメンテナンス、レストレイションに至るまで、幅広く対応するようになつた。とくにヒストリックカー・レースの実力は特筆されるもので、いくつものイヴェントで「DKエンジニアリング」のロゴにお目に掛かっていた。そう、「DKエンジニアリング」の社名も今までないディヴィッドさん、ケイトさんの頭文字にほかならない。

そこには洋書の中でしか見たことがないようなフェラーリが転がっている。当時は、殺風景な工場のなかに場違いなようにフェラーリが、といった取り合せだったのだが、こはどうだろう。

「10年前にここに越してきたんだ。ヴィクトリア時代の農場を改修したんだけれど、今まで一番大きなレストレイションだったんじゃないかな、この工場が。二年掛かりだつたもの」

と、案内してくれるジェイムスさんが話す。雰囲気をだいじにしつつ、充分な設備が整えられ、なかには「ミュウジアム・ショウルーム」まで備える。そこには、世界にこれ一台というフェラーリ 166MM「ピニン・ファリーナ・ベルリネット」など、まさしく宝石のようなクルマが収まっている。

そもそもは40年前、1977年にディヴィッド＆ケイト・コッティンガム夫妻によって設立されたもの。それも最初はジャガーXK120をレストレイションしレースをはじめたところからスタートした。それがフェラリ中心に発展し、販売からメンテナンス、レストレイションに至るまで、幅広く対応するようになつた。とくにヒストリックカー・レースの実力は特筆されるもので、いくつものイヴェントで「DKエンジニアリング」のロゴにお目に掛かっていた。そう、「DKエンジニアリング」の社名も今までないディヴィッドさん、ケ

## 30年前の「DK エンジニアリング」



かつての「DK エンジニアリング」も宝石級のフェラーリなどがあった。社長室にはケイト・コッティンガムさんが。



いまだも、家族経営を守り、息子のジャスティンとジェイムスも手伝っている。いま案内してくれているジェイムスさんは、コッティンガム家の次男なのであった。

古いモデルだけではなく、現代のフェラーリなどを整備する工場もある。しかし、一番目を瞪らされたのは一番奥の工場。なんと、エンジンもおろされシャシーとボディだけになつた、レストレイション途上のフエラーリ250LMが。表にあるフエラーリ275GTBだって、それだけ見れば興奮して釘付けになるようなモデル。だが「LM」はそれを見向きする余裕を与えないほどの存在なのだ。なんどこの「LM」は日本にあつたクルマ。松田さんのところで撮影させてもらったことがある。あつという間に陽が暮れてきた。綺麗な半月が「跳ね馬」風見鶲の向こうに見えている。長旅の末、休む間もなくやつてきた「DKエンジニアリング」で圧倒されるほどのフエラーリを見せつけられて、われに返つたら空腹と疲れがどつと押し寄せてきた。まだまだ仕事を終えそうもないコッティンガムさんにお礼を述べ、すっかり暗くなつた道を、宿泊予定の街へと急いだ。

10月31日（火）晴

さすがに長時間のフライトの疲れか、はたまたフェラーリの興奮疲れか、ぐつくりと寝込んだ翌日、最初